

Analysis of Humanity in Contemporary Society : An Inquiry into the Concept of High Quality Life

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-09-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立身, 芙希子 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/630

現代社会における人間性の考察

一質の高い人生の概念を問うー

立身 美希子

はじめに

明治初期の文明開化に端を発する富国への挑戦は、先の大戦により一度荒廃しつつも、その後めざましい進展をとげた。今や日本は主要先進国となり、高い技術水準と生活水準を実現している。国の様相が急速に変わってゆくということは、政治的な要素もさることながら、国民がその変動に適応していかなければ、達成されない。これまで日本が成長路線でこられたのは、よりよい生活を望む人々と、経済成長を目指す国との利害が一致していたからである。現在の日本のGDPは、アメリカ、中国に次ぐ第3位であり、内閣府経済社会総合研究所が2016年11月に公表した速報値でも、年率2.2%の成長率となっている¹。内閣官房日本経済再生総合事務局が発表している「日本再興戦略2016これまでの成果と今後の取り組み」の中でも、官民戦略プロジェクトで名目GDP600兆円の実現を掲げ、第4次産業革命（IoT、ビッグデータ、人工知能、ロボット）や世界最先端の健康立国を目指すなど、世界をリードしていくことを現実的目標として掲げており、日本は国際的に比較しても豊かな国となった²。

しかし、それでもなお、社会的課題は山積している。少子高齢社会に伴う課題に関すれば、賦課方式である公的年金システムの維持と信頼を得るには、より繊細な財政検証の見通しが必要となるということや、厚生労働省が平成27年に発表した、2025年に向けた介護人材にかかる受給ギャップ37.7万人³という溝をどのように満たすのか、という猶予のない問題がある。加えて、家庭、学校、職場など各々の場面でメンタルヘルスの不調に苦しむ人々も多く、国もこの現状を踏まえ、企業に対し従業員のストレスチェックと面接指導を義務付ける制度を、平成27年12月1日に施行させている⁴。

このように、よりよい生活を望み、経済成長を基軸として発展してきた日本だが、今日、日常生活に直結する課題を抱えている。政府もこの現状に対して改革を模索している。平成27年2月の内閣総理大臣施政方針演説では、経済再生と社会保障改革を一体化して取り組む姿勢が示された⁵。施策の中身に対しての意見は様々あると思われるが、経済が立て直されることと、社会保障が改良されることについては、多くの人々が希求するところであろう。続く平成28年1月22日の内閣総理大臣施政方針演説でのキーワードは、「イノベーション」と「一億総活躍社会」であった⁶。新たなとらえ方と新たな活用法で、皆が活躍する社会において、求められている中身は、経済活動への参加であり、経済成長が社会的課題を克服させていくという筋書きである。国は、

更なる成長戦略によって現代の課題を克服しようとしている。我々は、その豊かさの方向性に流れていこうとしている。

しかし、今日の生活水準を享受しつつ諸々の課題に直面している我々は、文明開化や高度経済成長期の時のように、先進の技術とシステムを探求することで豊かさを得ようとしてよいのだろうか。経済的成長路線をひた走り、主要先進国となった日本において、それでも生活に行き詰まりを感じるのはなぜだろうか。筆者は、この疑問を解かずに経済的成長路線を続けることに対し、人間が本来求めていることを見失ったまま、取り返しのつかない深みにはまっていくような危機感を覚えるのである。

本稿のテーマである、「質」とは、極めて感覚的な概念である。ゆえに、人生の質には、個々人の人生観、人間観といった要素が影響する。こうした観念は、個人的な要素と思えるが、その形成には社会的通念が大きく影響する。経済成長を基軸としてきた日本社会で生を営んできた我々現代人の人生観や人間観は、この社会通念に大きく傾倒しているのではないだろうか。そこで、本稿が目的とするのは、経済的成長路線が人間に及ぼした影響を考察し、そのうえで、いかなる人生でも人間を満たすもの、すなわち人間本来の希望を探ることで、質の高い人生とは何か、我々はどのような方向を目指すべきかについて、明らかにすることである。

1. QOL の変遷

社会的な動向として人生の質が問われるようになったのは、1960年代後半から1970年代、産業革命以降の環境負荷が庶民にも感じられる危機として露呈してきた時代である。森（2011）によると、1972年4月に開催された、西ドイツ金属産業労働組合主催の国際会議において、生活の質の向上がテーマとなり、労働問題だけでなく、教育、環境、健康などの多岐にわたって議論が展開されたという。また、同じく1972年にローマ・クラブが刊行した報告書『成長の限界』では、全地球的システムがモデル化され、「人口および資本の幾何級数的成長とその後にくる破局」（メドウズ他1972, 訳書 p.123）が明らかにされた。ローマ・クラブは報告書の中で以下の要素を、生活の質（= Quality of Life）と定義している。

「生活水準の向上、余暇の増大、すべての人々の環境の快適性の向上」（メドウズ他1972, 訳書 p.162）。

当時の人々は、自らの将来への不安と、環境負荷が及ぼす人類生存の危機を前に、物量では捉えられない、生活の質の向上を希求し始めた。森は当時のQOL議論について次のように述べている。

「QOL概念あるいはその向上は、非経済的な厚生、すなわち国民総生産（GNP）や国内総生産（GDP）などの経済的な成長の指標ではとらえられない豊かさ一般を含んだ概念として、明確な定義よりも、生活上の豊かさや望ましさすべてを含むある種のスローガンのように機能していた。」（森2011, p.101）。

一方、現在のQOLは、主に保健・医療の分野で推進されており、様々な指標が開発され、医療技術の向上に役立てられている。また、医療技術の発展は、QOLに「生命の質」という新たな概念を付随させた。「生命の質」が語られる時、それは他でもない自分の命の主導権を医療に握らせないための、権利の明確化と行使、という意味合いを持つ。QOL尺度がどのような方向性をもって開発されているかは、以下、WHO（世界保健機関）の定義するQOLから把握することができる。

「一個人が生活する文化や価値観のなかで、目標や期待、基準、関心に関連した自分自身の人生の状況に対する認識」（田崎・中根1997, p.4）

言い換えると、自分自身を取り巻く現状に対して、自分がどのような認識を持っているか、ということである。WHOが定義するように、QOLが極めて主観的なものだとするならばQOLは状態によって変動することになる。柴田は次のように述べている。

「個人の状態と環境条件の間には複雑な関係があり、環境条件が個人の状態の不十分さを補ったり、増幅したり、また反対に個人の状態が環境条件を改善させたり悪化させたりすると考えられる。そして両者が個人の主観的な評価の結果に影響しているが、その影響は評価基準によって調節（moderate）されるので、個人の状態と環境条件が同一であっても評価結果が全く同じになるとは限らないのである。」（柴田1992, p.69）。

このように、個人の主観は予測や状態の対比、環境との相互作用などで揺らぎが生ずる。質的豊かさには、おかれた状態に「こころ」や「精神」がどのように反応するかが大きく関わっている。しかし、この主観によるものを数値で捉えようとする、いかに感情の揺らぎを画一的に捉えるかが課題となってしまう。この時点で、人間は技術の対象物となり、QOLから、関係性という不確定要素は省かれているのだが、現代社会はそこに違和感を覚えることなく、指標化が進められてきた。自然環境や未来までを含めた包括的な志向で模索され始めたはずのQOLが、現代に至るまでに狭義に傾倒し、なぜそれが暗に了承されてきたのか。技術革新によって発展を遂げてきた人間社会の歩みに、その要因を探っていく。

2. 科学技術への依存

西洋の「キリスト教的人間観」、デカルトの「二元論」（1997, 訳書）、そしてカントによる「自我の確立」（2012, 訳書）は、人間を万物の支配者たらしめ、科学技術発展に大儀を与えた。人間中心主義のもと、科学技術は人間の現実的欲求を次々と実現していった。このような中で生まれたプラグマティズムの思想は、科学技術が生み出す結果こそ真理とするものである。さらに、この科学的方法とその経験に基づく科学技術に絶対の信頼を寄せてプラグマティズムを展開していったJ・デューイの「道具主義」（1968, 訳書）は、自然科学や科学技術、そしてこれらを思

惟する精神作用も、すべては人間の営みを成り立たせる道具であり、経験的、科学的に有効性が認められることが、価値として確証を得るという主張であった。ここに、人間の精神は、人間の営みを維持する道具となり、絶対的権威は人間から科学へと移行され、科学・科学技術主義の時代が到来した。

科学技術に支配される側となった人間だが、合理的労働は時間と空間を人間が支配している錯覚を生み出した。そして、この錯覚は、物質的欲求が満たされるほど強化される構図となる。さらにもう一つ、人々が科学技術主義を甘んじて受け入れていった原因が、大衆化である。巨大な生産機構が生み出した大衆の内にいる個人について、ヤスパースの見解を引用する。

「人間は、大衆として存在するときには、大衆のなかにおいてももはやその人自身ではない。(中略) 他人が持っているものを自分も持ちたい、他人にできることなら自分にもできるであろう。こういう嫉妬がころひそかに支配し、そこに他人よりもより多く所有し、より多くの価値を認められることによって楽しみをえようとする偏執が出てくる。」(ヤスパース 1954, 訳書 pp.33-34)。

大衆の内にいる個人は、その実体が曖昧な存在である。大衆の内において生まれた偏執は、自分の価値や生活の意義を大衆の中にしか見つけられない人間を作り出している。機械化が得意とする均質が、人々の大衆化によって人間の意識にも及んでおり、個人は大衆からはじかれることを恐れる存在になったのである。

このように、科学技術に支配され、人間性を失っている社会について、マルクーゼは次のように指摘している。

「…人びとが押しつけられた生存に自己同一化し、そのなかに自己の発展と満足を見出すときには、疎外の概念が疑わしいものとなる… (中略) …この同一化は仮象ではなくて現実である。(中略) 進歩の成果は、イデオロギー的正当化だけでなくイデオロギー的告発をも不可能にする。その法廷の前では、その合理性のもつ『虚偽意識』が真意の意識となる。」(マルクーゼ 1974, 訳書 pp.29-30)。

マルクーゼによると、生物学的水準を越えた人間の諸欲求は、その一次元的な社会にあらかじめ条件つけられているものの、機械による管理社会に教化され、真意となっているという。このような人間性の喪失は、情報社会となった現在の日本において、さらに深刻さを増している。

今日、データに裏付けられた情報は、最も信頼性のあるツールとして受け入れられ、行動の根拠となっている。この点について、ラングドン・ウィナーは著書『鯨と原子炉』(2000, 訳書)の中で、「情報社会の神話」と題して次のように言う。

「…彼らは、よい社会が計算装置の広汎な普及の副産物として、あるいはスピノフとして実現するだろうと強く示唆している。(中略) コンピュータ革命が、期待したとおりの結果をもたらしてくれることを受動的に待つ者にとって、技術決定論は単なる理論であることを

止め、一つの理想となる。それは技術変化によってもたらされた社会状況に対して、いっさいの判断ぬきに帰依しようとする願望となるのである。」（ウィナー 2000, 訳書p.177）。

ウィナーの指摘のように、情報社会では、科学技術が人間より優勢であり、人間が科学技術の側へ「逆適応」という事態が起きている。もはや人間の試行錯誤は無価値化し、我々は科学技術に依存しなくては行動できない状態に陥っている。

このような科学技術への依存と、人間を疎外した価値観は、人間の生命の実感を奪う社会システムを構築した。それは、合理的な経済社会には反する、最も人間的な部分、すなわち、誕生、病、老い、死、についてまでも、科学的思考法で執り行おうとする、合理化への心酔である。人間におけるこの4つの場面は、ことに内省を迫られるとともに、他者との関係性を必要とする場面である。しかし、現代社会は、この人間的課題を解決する方向ではなく、スピード感を持って回避する方向で進んでいる。

科学技術の能力を自らの能力と錯覚し、合理的な社会システムを構築してきた人間の歴史を経て、現代の日本社会は、その最たる地位にある。この社会システムにおいて、我々は人間的な課題に直面する機会を奪われ、自他共に利用価値を問われる「私財」となりつつある。それは、かつて、科学を神のように絶対視したプラグマティズムと、それに準ずる道具主義と同質の思想である。

では、人間から科学技術という虚飾を除いた時、人間が求めていることは何か。手がかりとなるのは、第2次世界大戦時、3年もの間、強制収容所に収監されながらも生き延び、「実存的人間観」（2011, 訳書）を打ち立てた、V.E. フランクルによる人間性の考察である。

3. 人間が求めることは何か

これまで述べてきたように、現代の人間は科学技術に依存して生活しており、人間を機械と同様の価値基準で判断するという人間性の危機が起きている。では、人間が失ったもの、そして本来求めていることは何か。この点について、フランクルの見解をもとに考えてみたい。

現在、我々が陥っている機械的価値観からすると、物事の真理は結果が示すのであり、快樂をもたらすことに価値が認められている。しかし、フランクルは次のように指摘する。

「一般に人間は快樂を意志するのではなく、まさに、彼が欲する(意志する)ものを意志するのである。(中略) 快樂は、価値ある行動の場合においても、価値に反する行動の場合においても、つねに同じ快樂であろう。」（フランクル2011, 訳書p.94）。

快樂とは不快ではない状態であるから、物事の経過でも未来でもなく、その一時の状態を指している。この利根的な生き方を人間の本性とするならば、まさしく人間は、先に挙げたウィナーの指摘のとおり、情報が神のごとく君臨し、よい社会は情報システムに与えられて実現することをただ待つのみ存在ということになる。そこには、一人一人の行為への倫理的価値は介在しない。

だが、人間はただ待つのみ存在ではない。それは、おかれた状態に、その意味を問わずにはいられないことと、指向的な行為によって得られる喜びの感情が、快樂とは異なる感情であることを実感として認識しているからである。「意志するものを意志する」(フランク 2011, 訳書 p.94)とは、喜びを求めて事を成す行為、と言い換えることができるだろう。時代を遡れば、人間が「病」や「死」といった苦に対し、これを超えるため指向した先にあるのが宗教であり、学問であり、科学技術である。これらは、苦しみを超えて、幸福を求める人間の努力の足跡とならずであった。しかし、科学技術の不可逆的な増殖によって、安易に快樂を得られるようになった我々は、喜びを感じるのに必要な、内省や思案に時間を費やすことをやめつつある。幸福の追求は、あふれる快樂に飲み込まれ、人間は人生の「苦」の意味を見失うことになった。

だが、我々は「苦」をさけて一人の人間の価値を認めることはできない。なぜなら、「苦」によって人間は独自の価値を見出すからである。人間の価値について、フランクは、活動や創造を通して実現される価値を「創造価値」、豊かな体験において実現される価値を「体験価値」と名付けた。そして、この二つの価値カテゴリーのほか、「態度価値」というカテゴリーがあることを論じている。「態度価値」について引用する。

「…ここでは、人間が変えることのできない運命に対してどのような態度をとるかということが問題だからである。このような態度価値を実現する可能性は、それゆえ、人間がみずからそれを引き受け、それを担うほかはないような運命に対峙する場合につねに生じるのである。(中略) この態度は、たとえば苦悩における勇気、没落や挫折においてもなお失わない品位といったものである。」(フランク 2011, 訳書 p.113)。

それぞれに幸福を求めるにあたり、必ずそこには理想と現実という差異がある。この差異が苦悩を生むのであるが、フランクはこの苦悩を、人生からの課題、すなわち運命として、それにどう応答するか、というところに人生の意義があるといった。理想という当為が人間に与えられている限り、そこには態度価値を実現する可能性がある。これにより、運命や苦悩といった、生命として避けられない課題は、人間に対し、生きる意義を与えているのである。

或いはここで、どのような態度を示そうとも、「死」の前には無意味ではないかと問い質すかもしれない。この点について、フランクは次のようにいう。

「もしわれわれが不死であるとすれば、当然ながらわれわれは、あらゆる行為を無限に先延ばしすることができるのであって、それをまさに今行うことはまったく重要ではなくなり、明日、明後日、あるいは一年後、十年後に行っても同じことになってしまうであろう。」(フランク 2011, 訳書 p.147)。

「死」がすべてを無意味なものにしてしまうのではないか、という問いは、無限であれば時々ふるまいの重要性は全く無くなるということから、否定することができる。それどころか、人生における機会の一回性と、人生の有限性は、人間存在に根本的な責任を課している。フランクは言う。

「この責任は、そのつど次の時間から生ずるべきものに対する責任であり、いかに次の日を形成するかということに対する責任なのである。」（ فرانクル 2011, 訳書 p.148）。

人生からの課題に対してのふるまひは、どのような状況におかれても無くならない自由であるとともに、常にその先を指向している。我々は、人生への応答の独自性において自由であるが、常に理想の未来から試される存在である。それゆえ、そのふるまいには責任が生じるとともに、責任を果たしていると感じられるふるまいをすることが、理想への充足感となり、喜びとなるのである。

このように、現代人が排除しようとしている「苦」にこそ、人生の意義と個人の尊厳を確実なものにする要素が認められた。生命に属する「運命・苦悩・死」を糧とした、自由なふるまいと、それが理想へつながっているという充足感こそ、人間が求め続けていることである。次項では、この充足感と喜びの関係について、さらに考察を深めていく。

4. 喜びとは何か

前項では、人間は誰もが、いかなる状況であっても、態度価値によって個々の尊厳が保たれることを確認した。そして、人生において「苦」がその価値を生み出すことを示し、「生命に属する、運命、苦悩、死、を糧として自由にふるまい、その充足感で喜びを得ること」こそが、人間が根本的に求めていることではないか、と推考した。では、「運命、苦悩、死」に対して、態度価値をもっていどみ、これを昇華せんとするところの喜びとはいかなるものだろうか。

フランクルの、「苦」に対する態度こそ生きる真価であるという主張は、自身の強制収容所被収容者としての体験によって裏付けられている。その体験記である『夜と霧』（1961, 訳書）では、極限状態において、精神的に滅亡した多くの人々と、精神的飛躍を成しえた人々との相異が明らかにされている。フランクルは滅亡していった人々についてこう述べている。

「…何の生活目標をもはや眼前に見ず、何の生活内容ももたず、その生活において何の目的も認められない人は哀れである。彼の存在の意味は彼から消えてしまうのである。そして同時に頑張り通す何らの意義もなくなってしまうのである。」（フランクル 1961, 訳書 p.182）。

未来に対し何かしらを創造する機会も、また未来から何かを享受する機会も失われた人々は、未来そのものを失った。向かうべき所を見失った人々は、もはや自身が今存在する意義を無くするのである。一方、この苦悩を生きぬき、価値の実現へと飛躍し得た人々の心持ちは如何なるものであったか。フランクルは次のように述べる。

「何人も彼の代りに苦悩を苦しみ抜くことはできないのである。まさにその運命に当たった彼自身がこの苦悩を担うということの中に独自の業績に対するただ一度の可能性が存在するのである。」（フランクル 1961, 訳書 p. 184）。

さらにこう述べる。

「この各個人がもっている、他人によってとりかえられ得ないという性質、かけがえないということは、－意識されれば－人間が彼の生活や生き続けることにおいて担っている責任の大きさを明らかにするものなのである。(中略)彼はまさに彼の存在の『何故』を知っているのであり－従ってまた『殆んどいかなる如何に』にも耐え得るのである。」(フランクフルト 1961, 訳書 pp.186-187)。

先に挙げた精神的滅亡をむかえた人々と、一方で極限状態において、態度価値の実現へ飛躍した人々との心持ちの対比から、人間の根幹的要素が何であるかが見えてくる。態度価値は、あらゆる状況が運命として未来からやってくるという認識から始まる。そして、その独自性と一回性は人生のかけがえのなさを自覚させるとともに、その責任をも自覚させる。つまり、人間は、「生命に属するあらゆる課題に向かっている、それは未来へ応じている」、という実感があれば、その人生を生き抜き、これを失えば人生を失うと同等なのだ。

このように考えていくと、態度価値をもって昇華せんとするところの喜びとは、達成感や幸せな状態といった、結果ではないことが分かってくる。人間は、自分の存在意義を、現在ではなく未来に求めている。これは、未来を失った人々が精神的滅亡を迎えたことから明らかであろう。態度価値の根本にある人生観、つまり、生命の課題に向き合い、応じていくことだという気づきは、未来から期待された価値ある生という存在意義を明確にする。人生の役割と意義を発見できることほど望ましいことがあろうか。ニーチェは言う。

「おのれの生の『なぜに?』が明らかにされているなら、おのれの生の『いかに?』は安価に手放してよい。」(ニーチェ 1993, 訳書 p.306)。

迷いなく、生命に属する苦悩を享受できる人生、人生における苦を他でもない自分の課題として品行を修めることのできる自由。このような、生命に起こりうる事態を否定しない、人間らしい人生を送っているという実感は、まさに、態度価値実現の過程において常に伴う喜びではないだろうか。

では、明らかになった人生の価値と喜びを踏まえて、生命の質をも左右するようになった現代の医療技術について考えてみたい。

5. 医療技術への問い

現代の医療技術は、我々の健康を維持するだけに留まらない。QOLが「生命の質」とも訳されるように、どのような身心状態で生を保つのか、また、保つべきか、という部分にまで医療的価値観は浸透してきている。生命の質と安楽死の観念について、竹下は次のように述べている。

「…人間の肉体の状態を質の判定基準とするものであって、これによれば、肉体的な苦痛によって「生命の質」は低下するとされる。（中略）また人格主義的には、苦痛は人間の精神生活を阻害することによって、「生命の質」を低下させるという論拠が示される。この後者の見方からすれば、苦痛が人間の品位ある人格的な生活を不可能にしていることになり、そのことによる「安楽死」は「尊厳死」の類型に属するということになる。」（竹下1998, pp.148-149）。

医療的価値観における最も深刻な課題は、肉体的な苦痛と、品位ある人格的な生活の不可能を因果関係でとらえており、そのために生命に優劣をつける行為にある。生命倫理学において議論されているこの行為は、誕生から死に至るまで操作できる技術力を手に入れた現代人が、今後の人間の在り方をどのように選択していくのか、大変大きな課題である。生命倫理が問われる数々のトピックの中で、臓器移植と遺伝子医療に焦点を当てる。いずれも最先端の医療技術であるが、これらの技術が開発されている背景はなにか。

技術開発の原動力は、利便性への欲求と合理化への心酔、そして大衆化ということは、先に述べた。技術的に可能であることは、真価となり、次の開発への足がかりとなる。前田は、技術における「できる」と「べきである」の関係について、次のように指摘している。

「例えば『臓器移植』のような技術を考えてみると、この技術は重い臓器不全に陥っている人々に『生命への希望』を呼び起こす。（中略）もし行わないと決めるならば、患者から生命の希望を奪うことになり、彼らから倫理的な非難を受ける可能性がある。こういった『技術』は、『社会』という場の中に置かれるとき、それだけでもはや倫理的中立性を失って一定の倫理的な偏向を帯びるのである。」（前田1998, p.277）。

死を予見され、苦悩の只中にある者にとって、その苦悩は技術によって取り払われるという知らせは、まさに希望である。一方で、その苦悩を肩代わりできない当人以外の者は、その希望も奪うことはできない。これにより、移植という技術は、「するべきである」という技術になる。この理屈は、遺伝子医療にも当てはまる。ヒトゲノムの解読が完了し、遺伝子操作を用いた治療は技術的に可能となった。出生前診断に関しては、日本でもすでに行われており、その後の判断について議論を呼んでいる。物議をかもしつつも、遺伝子に関する技術が開発されていくのは、この技術が治療や予防の延長として捉えられているからであろう。疾病の原因遺伝子が分かる、あるいは予測がつき、それを取り除くことができる技術が開発される。これは、患部の摘出手術や予防的処置の先進的な技術であるから、開発するべき、という考え方である。

このような医療技術の真価を、前述した「生命全体を享受した人間らしいふるまい」ののっとして考え直してみる。論点は、開発され続ける医療技術は生命を疎外しないのか、ということである。これまで述べてきたように、人生における様々な課題は、当人だけが引き受けることのできる課題として与えられ、これにより、尊厳と自由が保たれている。ここで注意したいのが、あらゆる課題は他との関係性を抜きに進展しないということである。たとえ、自身の病苦や死の課題にせよ、自身のふるまいは家族、他者、社会などに相互に影響を受ける。さらには、先に挙げた

フランクルの著書のように、時代を超えて影響を及ぼすことすらある。そして、明白なことだが、関係する他者それぞれに、同じように尊厳と自由がある。しかし、ここで取り上げている医療技術は、この関係性を留意しているとは言いがたい。小松は、脳死・臓器移植のドナー不足についてこう述べている。

「…臓器不足とは『脳死者不足』のことにほかなりません。それゆえ、臓器不足を憂うことも、実のところ、交通事故や水難事故、自殺未遂、脳の疾患などによって、脳死になる人が少ないことを憂っていることになるのです。」(小松2010, pp.27-28)。

この、ドナーに関する問題点は、ドナーを待ち望むことが非道徳的な感情を生み出してしまうということに留まらない。問題は、死を目前にした人間(ドナー)と、死を控えた人間(レシピエント)の生命が、医療技術によって比較対象物となっていることにある。本来ならば、それぞれに自分の精神が、そして身体がどのように死に向かっていくのかという生命の自由があり、そこに携わる他者も、出来事に対する態度価値という人生の意義を見出す課題であった。しかし、移植技術は、一つ(ドナー)を使って、もう一つ(レシピエント)をより長く稼働させる技術を可能にしてしまった。人々は、生を繋いだ者の声と活動する姿に、はっきりと結果を感じることができる。そして、技術が生み出した結果を前に盲目になり、疎外された生命の本質に気づくことはない。それは、独自性と一回性において尊重されるべき人生に対し、医療技術が介入し比較対象物とすることによって、それぞれの人生からの課題に応じる自由が奪われているという事実である。

遺伝子医療についても、人間の関係性や、生命の本質を見失っている現代人にとって、危険を伴っているといわざるを得ない。浜野は次のように指摘する。

「…社会全体の障害への態度、ひいては、多様な生命のあり方に価値を見いだしてゆくような態度が強化され、人々の日々の生活の内に実現されなければ、個々の家庭や個々の男女の一見まったく私的で自由な決定を通じて、ナチスの優生学的政策が強権を用いることなしに実現される可能性が存在するのである。」(浜野1998, p.125)。

本能の深淵に至るまで科学技術に依存し、「苦悩」に対峙することに価値を見いだせない現代人は、自らの選択が結果的に優生学的判断であったとしても、それに気付くことはなく、また社会もこれを阻止する気運を持ち合わせていない。浜野の指摘は、今日の医療技術の方向性が、一様な人間と限られた社会を相乗的に作り出す危険性を示唆している。遺伝子医療が、治療の延長にあるとして、その行為は病苦に応じる者の一つの支えであり、選択的ツールであるべきだろう。

このように、医療技術が開発されていく過程での問題点は、技術が生命の営みを助けるのではなく、生命が技術に支配されていくことにある。そして、そのことに我々が気づかないまま、さらに医療技術開発が進んでいることにある。すでに高い水準にあり、なお発展する科学技術や医療技術を人生の質の向上につなげるには、人間観の転換が必要である。

6. 技術力の行方

科学技術の効力に依存してきた我々が、人間と科学技術の関係を捉え直し、どのようにふるまっていくのか、まさに態度価値が問われている。

生命に属する様々な苦を糧に、自由にふるまう姿を人間力というならば、我々が考えていかねばならないのは、人間力と技術力の関係性であろう。松木の言葉を引用する。

「すなわち手は5本の指を手のひらが支える形をしている。5本の指は個別技術であり、それを支えあるいは批判的に見る視点を与えるのは思想や哲学や宗教であり、これらは手のひらの部分に相当するのである。科学技術万能主義が横行して、思想・哲学・宗教があまりにも弱体化あるいは無視されている状況は、手の形がいびつになっていることだということができるのではないだろうか。」（松木2006a, pp.231-232.）。

松木は技術者の姿としてこのような指摘をしているが、これは、技術者でなくとも心に留めておかねばならない。なぜならば、弱体化されている思想・哲学・宗教の類とは、生命の問いかけに応じる人間の試行錯誤の結実だからである。

人間は、有限性と一回性という生命の宿命を、精神の飛躍により受容しようとしてきた。ことに宗教は、「死」という、いかんともしがたい「苦」と、人知を超えた自然エネルギーへの「恐れ」という、逃れられない苦悩に対峙するために、脈々と紡いできた精神の支えである。個人が他者に代えられない人生の課題に応じるにあたり、精神の飛躍はただ一人、個人に任されているのではない。受け継がれてきた心の拠り所（宗教）や、時代を反映する思考の方向性（思想）を支えにしながら、独自の精神的飛躍を目指すのである。そして、哲学は、宗教、思想、そして己を省みる役割をもつ。我々は、ややもすると今ここの自分を中心に行動しやすい。これを是正するのが、自然や時空、宇宙の内に己を捉えた、ホリスティックな視座で今を省みる哲学的思考である。

このように、思想・哲学・宗教とは、人間が生命の宿命に向かうために受け繋いできた人間力である。松木の指摘する、思想・哲学・宗教の弱体化とは、言い換えれば、人間力の弱体化ということになる。宿命に対し自由に振る舞う人間力を軽視し、技術の発展ばかり望む行為は、自ら人間の尊厳を蔑にしている。技術は、生命に属する苦悩（生老病死）を操作し排除する方向へ発展させてはならない。現代科学技術倫理について松木はこう述べている。

「…自然や環境に対する畏敬の下で、情報化社会における人権や人格に対する畏敬の下で、また生命や生や存在そのものへの畏敬の下で、いっそうの研究開発にまい進していくものでなければならない。」（松木2006b, p.17）。

松木の言う、「畏敬」を呼び起こすものとは、本稿で明らかにしてきた生命の本質と人間力に他ならない。この先、さらに専門性を増していく技術が、生命に馴染むものなのか、我々は目先の結果にとらわれていないか、技術とその技術を求める自分自身を省みる必要がある。日本に住む我々の暮らしは、もはや自身の手の及ばない所で維持されていることが当たり前となっている。

それは、科学技術の特徴である大量生産・大量消費、合理化、効率化が、地球規模で展開していることに由来する。様々な国際問題に対処するために結成されたシンクタンク「ローマ・クラブ」は、人類のQOL向上のための方向性として次のように提言している。

- 「・先進国（北）では－失業者数の増加を伴わない『足るを知る』の実践
 - ・南北関係－万人に平等な公共財の使用権の付与
 - ・開発途上国（南）では－自然破壊と開発のデカップリング（分離）」
- （ワイツゼッカー他2014, 訳書p.334）

人類が破滅に向かわない方向性を指示しているローマ・クラブは、このように各地域で異なる目標を達成していかなければ、人類の進展は望めないとしている。先進国である日本に住む我々は、現在の生活が、不平等な財源のもとに暮らしている人々や、自然破壊という犠牲のうえに成り立っている事を再度自覚すべきである。

科学技術の発展は、我々が倫理的課題を解決する暇もなく、可能という推進力で突き進んでいる。しかし、その可能な技術を選択するか否かは、我々がどのような世界を望むのか、自分以外の視座で人類の足跡と未来を想像することに託されている。

この心的作業において留意すべきは、現代の社会秩序が、自他ともに利用価値を求めるイデオロギーを背景に成り立っており、我々は人生におけるあらゆる出来事を、良し悪しのデュアリズムで判断してきたという自覚と反省である。他者に関心を向け、自分とは違う人生を生きているという当たり前の事実を軽視せず、あたかもその人となって人生を見つめると、代行などできないことが明白となる。なぜなら、想像し得る限りの他者の苦悩に対し、どのような精神の過程があって現状の本人が存在しているのか把握しかねるとともに、これからその他者に起こるだろう想像し得る限りの苦悩に対し、自分はどう向き合えば良いか全く分からないからである。一人一人の人生を細やかに想像すると、どれほど多様な苦悩が、様々に克服されてきたのか、人間の柔軟な精神に驚かされる。これが、生命に対する人間力である。

この、あたかも他者になりきった人生の想像は、安全と安心が脅かされている人生になるほど、想像力のキャパシティを超えてしまう。ここで我々は、「犠牲」と向き合わねばならない。幸いにも、明日の生存を心配することなく日々を過ごす我々に対し、世の中にはそうではない人々が多数存在する。貧困、格差、紛争やテロ、環境汚染など様々な要因があるが、それらは人間の活動によって引き起こされている危機である。このような、想像を絶する苦しみを被っている人生を思うと、かつてフランクフルが極限状態の人間に見出した、態度価値の実現という精神の飛躍が頭をよぎり、想像の逃げ道となるかもしれない。

しかし、それは違う。グローバルに物と情報が行き交う現代社会では、事象の因果関係や国際情勢など、一般国民でも知ることができる。つまり、我々は、自分を含めた人間が引き起こす、貧困、格差、紛争やテロ、環境汚染などを抑制できずに、他者の生命を危機にさらしているのである。彼らが直面している生命の危機は、運命からくる課題ではなく、我々が差し向ける苦しみであり、「犠牲」である。我々は、今の生活が他者に犠牲を強いているという事実を、人生の課題として受けなくてはならない。

このように、自分以外の視座で人生の足跡と未来を想像することで、多様性への畏敬や関係性への畏敬、そして、自身のふるまいへの責任感を得られるのではないだろうか。

おわりに

1960年代後半から社会的に問われるようになったQOLは、当初の包括的概念から離れ、現在では極めて個人的で狭義的な概念となっている。

人間らしさを欠いていると言わざるを得ない解釈へと進んできた背景には、現代社会の科学技術へ依存した人間観があった。自他ともども、存在意義を利用価値でしか捉えることしかできなくなっている現代において、人間らしさとはなにかを改めて見出さなくては、人生の質を問うことはできない。

このような人間性の危機に対して、人間の尊厳と喜びについて考察してきた。現代は、あふれる快楽によって、人生の「苦」の意味を見失っている。しかし、その「苦」にこそ、人生の価値があることを、フランクフルトは明らかにした。人生で起こる全ての苦悩は、それにどう応じていくかという、ふるまいの自由において、態度価値実現の機会となる。この運命に応じるという態度は、創造と体験の機会を奪われてもなお、無くなることはなく、未来から期待された価値ある生という存在意義を明確にしている。ここに、あらゆる人間の尊厳が保たれており、人生の喜びが伴う。なぜなら、運命に応じるという未来志向の態度は、なぜ生きるのかという人生の問いを超越しており、他でもない自分自身の生命を全うしているという喜びに満ちているからである。

明らかになった人間の尊厳と喜びを念頭に、現代の先進医療技術が人間性を疎外していないか検討した。臓器移植は、ドナーとレシピエントの二つの生命が関わる技術である。問題は、それぞれの生命が、医療技術によって比較対象物となり、ドナーの生命は、レシピエントの生命を長く稼働させるために使用されることにある。自分自身の生命を全うするという尊厳を、この技術は奪っている。

しかし、可能である技術を前にして、レシピエントの生きる希望を奪うことに対する非難に、論ずる答えを持ち合わせていない現代社会は、臓器移植を、行うべき技術と認めている。背景には、苦悩は退けるものとする現代社会の人生観と、人間の価値を利用価値と同等に見る機械的な人間観がある。このような観念を改めないまま、遺伝子医療が発展し続ければ、結果として優生学的選択をしても、それに気づかない社会となる危険性を孕んでいる。

最終項で述べたように、現代に生きる我々は未来に対し、これからの科学技術の方向性を選択していく責任を担っている。生命は、「生老病死」を辿るものであり、その過程には様々な苦難がある。科学技術は、その苦難を克服しようと人間が努力し、発展させてきたものでもある。しかし、合理的に結果を得られる利便性に心酔し、科学技術を人間の力と錯覚した人間は、人間自体に機械的な価値観を求めてしまった。人間が、運命から来る課題（苦悩）に、自由に応じる喜びを取り戻すには、誰もが持つ人間力に目を向けねばならない。人間力とは、生命の問いかけに応じて人間が試行錯誤する力であり、思想や宗教、哲学はその支えとなる。人間力は、精神を飛躍させ、他でもない自分の人生を生きているという喜びをもたらす。

現代社会は、いよいよ生命を操作し、情報を使って未来を操作する技術を可能にした。我々は、

自ら人間性を排除した社会を構築してしまわないためにも、全ての人々が人間力を発揮して人生を送ることができる世界を補うものとして、科学技術を選択していかねばならない。

〈注〉

1. 内閣府経済社会総合研究所 (2016)
http://www.esri.cao.go.jp/jp/sna/data/data_list/sokuhou/gaiyou/pdf/main_1.pdf (accessed 2016-11-23)
2. 内閣官房日本経済再生総合事務局 (2016)
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/keizaisaisei/pdf/2016saikou_torikumi.pdf (accessed 2016-11-23)
3. 厚生労働省 (2015)
http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-12004000-Shakaiengokyoku-Shakai-Fukushiki-banka/270624houdou.pdf_2.pdf (accessed 2016-11-23)
4. 厚生労働省 (2015)
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/roudoukijun/anzeneisei12/pdf/150422-1.pdf> (accessed 2016-11-23)
5. 第189回内閣総理大臣施政方針演説
http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement2/20150212siseihousin.html (accessed 2016-11-23)
6. 第190回内閣総理大臣施政方針演説
http://www.kantei.go.jp/jp/97_abe/statement2/20160122siseihousin.html (accessed 2016-11-23)

〈引用文献〉

- D.H. メドウズ等 (著). 大来佐武郎 (監訳). 1972 『成長の限界：ローマ・クラブ「人類の危機」レポート』ダイヤモンド社
- E.U. ワイツゼッカー他 (著). 吉村皓一 (訳). 林良嗣 (監). 2014 『ファクター5』明石書店
- F. ニーチェ (著). 原佑 (訳). 1993 『権力への意志』筑摩書房
- H. マルターゼ (著). 生松敬三・三沢謙一 (訳). 1974 『一次元的人間』河出書房新社
- K. ヤスパース (著). 飯島宗享 (訳). 1954 『現代の精神的状況』河出書房
- L. ウィナー (著). 吉岡斉・若松征男 (訳). 2000 『鯨と原子炉：技術の限界を求めて』紀伊國屋書店
- V.E. フランクル (著). 霜山徳爾 (訳). 1961 『夜と霧』みすず書房
- V.E. フランクル (著). 山田邦男 (監訳). 2011 『人間とは何か 実存的精神療法』春秋社
- 小松美彦. 2010 「知っておきたい、考えたい、脳死・臓器移植13のこと」小松美彦・市野川容孝・田中智彦 (編) 『いのちの選択』岩波ブックレットNo.782
- 柴田博. 1992 『老人保健活動の展開』医学書院
- 竹下賢. 1998 「生命の質と安楽死における法と道徳」加藤尚武・加茂直樹 (編) 『生命倫理学を学ぶ人のために』世界思想社. pp.143-153.
- 田崎美弥子・中根允文. 1997 『WHO/QOL-26 手引』金子書房
- 浜野研三. 1998 「物語を紡ぐ存在としての人間—パーソンに代わるもの」加藤尚武・加茂直樹 (編) 『生命倫理学を学ぶ人のために』世界思想社. pp.119-128.
- 前田義郎. 1998 「医療技術と生命倫理」加藤尚武・加茂直樹 (編) 『生命倫理学を学ぶ人のために』世界思想社. pp.274-288.
- 松木純也. 2006a 「技術者倫理」. 松木真一 (編) 『現代科学と倫理』関西学院大学出版会. pp.205-265.
- 松木真一. 2006b 「現代科学技術倫理の確立をめざして」. 松木真一 (編) 『現代科学と倫理』関西学院大学出版会. pp.1-21.
- 森芳周・宮島光志. 2011 「環境倫理と生命倫理を架橋する包括的 QOL 概念に関する臨床哲学的考察」『日本海地域の自然と環境』福井大学地域環境研究教育センター研究紀要 (No.18). pp.99-111.

〈参考文献〉

- F. カブラ（著）. 吉福伸逸・田中三彦・上野圭一・菅靖彦（訳）1995『新ターニングポイント』工作舎
- H. ヨナス（著）. 加藤尚武（監訳）. 2000『責任という原理—科学技術文明のための倫理学の試み—』東信堂
- I. カント（著）. 熊野純彦（訳）2012『純粹理性批判』作品社
- J. デューイ（著）. 清水幾太郎・清水礼子（訳）1968『哲学の改造』岩波文庫
- R. デカルト（著）. 谷川多佳子（訳）1997『方法序論』岩波文庫
- 岡野守也. 1990『トランスパーソナル心理学』青土社
- 澤佳成. 2009「人間・生物の生存の視点からの『自然の価値』問題—環境倫理における『人間中心主義』と『非人間中心主義』の共通基盤の探究から」総合人間学会（編）『科学技術を人間学から問う』学文社. pp.201-212.
- 高月義照. 1994『人間学—こころの地動説・増補版』北樹出版
- 高木仁三郎. 2012『科学とのつき合い方〈新装版〉』河合文化教育研究所
- 田村誠. 2002「保険医療における『個人の価値観に基づくQOL尺度』の可能性と課題」. 社会政策研究3 編集委員会（編）『特集生活の質研究（QOL）と社会政策』東信堂. pp.29-46.
- 三重野卓. 2007「共生をめぐる意識と『生活の質』志向」『応用社会学研究』No.49. pp.147-161.
- 鷺田清一. 1998『悲鳴をあげる身体』PHP 研究所